「湛睿の非情成仏義の基礎的研究」

龍谷大学大学院
高田　悠

一、はじめに

中世華厳教学がいかに発展していったのかを知る上で、論義の解明が必要不可欠である。それは既に多くの研究者が指摘しているように、平安時代に三会・三講が整備されて学侶の登龍門となったことで、各宗内において論義の研鑽も活発化し、当時の問題意識をも踏まえつつ教学が発展したためである。[1]

そもそも論義とは、法会の場において「仏法に関する議論」[2]を行うものである。その分類としては、実際に行われた内容を記録している『法勝寺御八講問答記』『仙洞最勝講疑問論義抄』などの「論義鈔」、論題別に様々な人師の説を集めた「龍女成仏」や「第九識体」などの「短釈」、その「短釈」をまとめた「短釈集」、寺内の僧侶が集まって論義のための学習を自由闊達に行なった「談義」の記録である「聞書」などがある。これらは一見すると、「細かい経論相互の矛盾を議論する教理論争である側面」[3]であり、議論するための議論であるようにみえるが、「論義鈔」「短釈」「短釈集」「聞書」を解明することで、同じ宗派内でも著述者がどのような立場で義を述べていたか明らかになるであろう。

これらの論義に関連する書物のうち、東大寺図書館には多くの短釈集『華厳宗論義鈔』が収められる。それらを精査する中で、今回取り上げる『華厳宗論義鈔』（121函357号、以下、函・号は省略し、／で示す）

を見出した。その中には「非情成仏」、「等覚別位」、「首楞厳三昧」がまとめられている。この『華厳宗論義鈔』「非情成仏」の中には、戒壇院第六代住持である明智房盛誉（一二七三―一三六二）、高山寺の学頭を勤めた義林房喜海（一一七八―一二五一）、金沢称名寺第三代住持の本如房湛睿（一二九一―一三四七）など様々な日本華厳諸師による説が収められている。

非情成仏義は『涅槃経』に「非ストハ仏性ニ者、所謂一切ノ牆壁ト瓦石トノ無情之物ナリ。離ニ如キ是レ等ノ無情之物ヲ、是レ名ニ仏性ト一。」[4]とあることから、牆壁や瓦石などの非情にも仏性を認めるか否かという観点より議論されるものである。院政期には親円（？―一〇一九―？）の『華厳種性義抄』を嚆矢として、聖詮（？―一一九九―？）、審乗（一二五八―？）などによって論じられた。[5]

このように「非情成仏」は多くの華厳宗諸師によって注目されていた論題であるが、『華厳宗論義鈔』のうち、特に注目すべきは、「古題加愚抄分」として挙げられる湛睿の『古題加愚抄』である。本書はこれまで、納富氏［一九六四］によって金沢文庫・東大寺図書館に所在していると指摘され、目次部分にある「問い」のみが挙げられているばかりで、未だその全体は明らかにされていなかった。しかし、内容の一部を検討しただけでも、既に拙稿［二〇一五］で指摘した通り、それまでの人師には見られない湛睿独自の説が展開されていた。さらに『古題加愚抄』は、いずれの論題も経論や喜海『五教章略文義』、宗性（一二〇二―一二七八）『華厳宗探玄記香薫抄』などの「古題」に対して、疑難を加えるという様式を取っている。そのため湛睿がどのように華厳教学を理解していたか知る上で、本書の解明は重要なものである。

よって、本稿では現在確認できる『古題加愚抄』を収集・整理し、今回は特に、その中でも盛んに議論された論題「非情成仏」部分の翻刻・読解を行なった。これをもって再度、湛睿の非情成仏義の特色を考察し、『古題加愚抄』が湛睿の撰述であることを明らかにしたい。

二、『古題加愚抄』書誌概要

（1）『古題加愚抄』の諸本

はじめに『古題加愚抄』の現存諸本を整理したい。『国書総目録』、それに基づき作成された「日本古典籍総合目録データベース」、『仏書解説大辞典』、『東大寺図書館蔵貴重書写真帳目録』によると、現在確認できるテキストは以下（ア）～（ク）の八部十五種である。この十五種以外にも、今回翻刻読解した東大寺図書館所蔵『華厳宗論義鈔』のように「古題加愚抄分」として存在している恐れもあるが、今回は書名に『古題加愚抄』を掲げているものを挙げる。

金沢文庫

（ア）いずれも書名は『古題加愚抄』とある。七巻七冊。（36／1／1～7）すべての表紙右下には「湛睿」とある。七冊それぞれの論題は、「第一」、「第二」、「重累傍布」、「能遍計心」、「遺教大小／文殊不二」、「成論大小」、「仏無々漏五蘊」である。「第一」には十四題、「第二」には二十六題収められる。本書は全体的に虫損が多く、塗りつぶしや余白を埋めるような書き足しが散見される。道津［二〇一三］で指摘されるように、本書も湛睿による草稿本であると考えられる。

納富［一九六四］は、「遺教大小／文殊不二」の前表紙裏に「康永三（一三四四）年六月廿六日」とあり、さらには凝然の『探玄記洞幽鈔』が引用されることから、湛睿末年の撰述としている。[6]

東大寺

（イ）いずれも書名は『性宗古題加愚抄』である。二巻二冊。（121／306）表紙右下には「静波」とある。
一冊目：「能遍計執心」、［情存之］明徳二（一三九一）年の奥書がある。
二冊目：「三性同異」

（ウ）書名は『古題加愚抄』とある。一巻一冊。（121／307）内表紙右下に［□□］（判読不能）、左下に「戒壇院　長尊」、巻末に「釈子照観〈俗年廿出之〉」とある。目次部分に「相伝正誉」とある。それぞれの論題は、「便成正覚事」、「非情成仏事」、「当相即道事」、「乃至無色事」、「法界縁起並縁性摂否事」、「此処成果事」の六題。書写年は不明。

（エ）書名は『古題加愚』。一巻一冊。（121／308）内表紙右下に「戒壇院　長尊」、左下に「霊満之」中央に「龍女成仏」、本奥書に「于時正和四（一三一五）年〈乙卯〉二月八日於泉州久米多寺方丈記之貧道小比丘湛睿〈通夏　卅／俗年五九〉」とあり、書写奥書に「至徳三（一三八六）年正月十八日於東大寺戒壇院長老坊書写之也。為同廿六日次論義用之俄所写也／小比丘霊満〈通四夏／俗念七〉」とある。

（オ）書名は『古題加愚』とある。三巻三冊。（121／309）全内表紙右下に「尭周」と記される。
一冊目：「第九識」、内表紙左下に「戒壇院　長尊」
二冊目：「遍計深心」、内表紙右下に「相領賢盛」
三冊目：「百億四天下」、「相領賢盛」

（カ）書名は『古題加愚抄』とある。一巻一冊。（121／310）内表紙中央に『古題加愚』、右下に「伝経顕」、左下に「賢盛」、奥書に「応永七（一四〇〇）年十二月二十六日講問用意／華厳論義／賢盛〈廿五〉」とある。

（キ）『華厳宗論義鈔』とある。一巻一冊（121／357）全二十六丁の内、七丁右から十四丁左が「古題加愚抄分」「非情成仏」である。本書には他に論題「等覚別位」、「首楞厳三昧」が収められる。書写年代は不明であるが、盛誉「円教非情成仏事」が「嘉暦二年」（一三二七）に記されたとあるので、それ以降の成立であることがわかる。

柳瀬福市

（ク）鎌倉期写本一冊。本書は、『国書総目録』によると端本であると書かれるが、所蔵者及び詳細は不明である。

以上、現在確認できる資料の中では、（エ）『古題加愚』「龍女成仏」の正和四（一三一五）が最も古く成立したことがわかり、次いで（ア）『古題加愚抄』「遺教大小／文殊不二」は康永三（一三四四）年に著述されたことがわかる。（エ）『古題加愚』「龍女成仏」は湛睿が四十五歳、泉州久米多寺に在住していた時のもの、（ア）『古題加愚抄』「遺教大小／文殊不二」は七十四歳、金沢称名寺に在住の時のものである。

また、（エ）『古題加愚』「龍女成仏」には、本奥書に「古抄ノ中ニ有リ此等ノ問答・料簡一。今更ニ加ヘ文義ヲ、倍致シ潤色一或ハ刪シ或ハ補ヒ以テ折ヲ写レ之ヲ」[7]とあることから、湛睿は古くから議論されてきた論題（古題）に対して学問研鑽するために、疑難を立て、詳細に議論していったと考えられる。その後、（エ）『古題加愚』「龍女成仏」や（オ）『古題加愚』「第九識体」に戒壇院の僧侶による「華厳論義の用意のために書写する」[9]

という書写奥書があることから、他の論題についても論義のために書写されたのであろうと推測される。

（2）『古題加愚抄』「非情成仏」の諸本

次に、先に確認した『古題加愚抄』のうち、論題「非情成仏」が説かれる諸本について概観したい。

「非情成仏」に関する華厳論義のうち、第一に筆者が閲覧したのは、（キ）東大寺図書館所蔵『華厳宗論義鈔』（121／357）「非情成仏」である。本書は、弁玄や盛誉、『夢中戯』といった書物の「非情成仏」に関する部分を収集したものである。これを底本として今回、翻刻読解を行った。

しかし、底本は虫損が甚大で読解不能部分も多く、他本と対校することが不可欠であった。そのため用いたのが、（ウ）東大寺図書館所蔵『古題加愚抄』「非情成仏」（121／307）（以下、甲本とする）と（ア）金沢文庫所蔵『古題加愚』第二「非情成仏」（36／1／2）（以下、乙本とする）である。

甲本は、書き込みが少なく塗りつぶしや虫損も少ないため、全体を把握することができる。乙本は虫損が多く、塗りつぶしや余白を埋めるように書き足している部分もあり、一部翻刻不能な部分があった。これら三本を比較すると、底本と乙本とはほぼ文字の移動がなかった。甲本は、底本・乙本で「有情相」とある部分が「有情性」となるなど文字の移動が多いので、意味を重視して翻刻・読解を行った。

三、湛睿における非情成仏義

ここでは、拙稿［二〇一五］で指摘した点を踏まえて、湛睿の非情成仏義の特色を紹介し、『古題加愚抄』「非情成仏」が湛睿の撰述であることを明らかにしたい。

（1）湛睿の非情成仏義の特色

まず、湛睿が著した『華厳演義鈔纂釈』には、

問フ、凡ソ能観ノ智トハ者、縁慮分別之心法也。更ニ於ニ非情草木ニ不レ可レ有ニ縁慮分別之義一。縦ヒ雖モ円経ノ意ト、争カ以テ草木等ヲ為ス能観ノ智ト乎。若シ強ヒテ云ハハ有リト此義一者、何ソ分カツヤ情ト非情等ノ別ヲ乎。答フ、彼ノ三乗教ノ意、難シテ開覚仏性ヲ唯タ局ルニ有情ノミニ。若シ依ラハ円教ニ、仏性及ヒ性起皆通ス情非情ニ。既ニ開覚仏性ハ通セハ非情草木ニモ、能観之智豈可キ簡フ外事ヲ乎。[10]

とあり、ここでは、「縁慮分別する能観の智は非情には認められず、円教においてもその義を認めるべきではない」という問難に対して、法蔵の説[11]に則り、「三乗教においては開覚仏性は有情にのみ限られるが、円教であれば仏性も性起も有情と非情とに通じるため、非情草木にも開覚仏性がある」と論じられている。

これまでの華厳人師においては、円教位において性起であるから有情と非情とに区別はないという説を立てるものの、非情に覚性があり、発心修行することについては明確に否定していた[12]。この箇所で、湛睿が非情の発心修行についてどのような態度であったかは不明であるが、開覚仏性については認める姿勢であるとわかる。

（2）『古題加愚抄』撰述者をめぐって

次に、『古題加愚抄』でいかに非情成仏義が説かれているか確認したい。

第一問答の難において、開覚仏性の有無および発心修行について、以下のように難を立てている。

難シテ云ハク凡ッ成仏トハ者、所レ依スル開覚仏性之有無ナリ。縦ヒ雖モ許スト有リト開覚性一、若シ無クハ発心修行一スルコト者、亦不レ可カラ有二成仏ノ義一。故ニ知シヌ。今ノ非情成仏トハ者、草木等具二備シ開覚性一ヲ、又可シ許ス発心修行一ヲモ。若シ雖モ許スト成仏義一而不レ備ヘ開覚性一ヲモ、無クハ発心修行一者、豈免レム無因得果之過一ヲ耶。尓者非ス謂フニハ無情モ亦有リテ覚性一同シクレ情ト成仏スト等之解釈、尤モ難シ思ヒ耶。〈是一〉[13]

すなわち、成仏は開覚仏性の有無によるという説に対して、開覚仏性があっても発心修行することがなければ成仏することはないと論難する。したがって、非情もまた成仏する以上は開覚仏性を有し、発心修行をも行うと理解すべきだと指摘する。もし非情成仏を述べるにあたって、開覚仏性を備えず、発心修行もしないならば、無因得果の過を免れることができない。したがって、「非情にも覚性があって有情と同じように成仏する」ということを否定する見解は容認できないと難ずるのである。これに対して答文では、

答フ、実ニ如クナラハ来難ノ、若シ許サハ成仏一者、縦ヒ雖モ非情草木ト、具ヘ開覚性一ヲモ又可キ許ス発心修行一ヲモ也。其ノ故者、以テ有情之性一ヲ融スル無情之相一ヲ故ニ、摂取ス有情之開覚性並ニ発心修行一ヲ。令ム融ス通セ無情一ニ之時、豈ニ不ルヤ許サ非情ノ発心修行一ヲ。故ニ不レ可カラ有ル無因而得果之過一也。是ヲ以テ清涼〈抄四上〉釈ス教ノ所被ノ機ヲ中ニ云ハク、謂ク約シテ円融一ニ即一切ナリ。則チ無情之境モ亦是レ所被ナリト文。[14]

とし、非情草木でさえも開覚性を具え発心修行を認めるべきだという。その上で、「有情の性をもって無情の相を融通するため、有情の開覚性と発心修行が非情に摂取され、非情の成仏となる」とし、非情の発心修行を主張したのである。以上のように、『古題加愚抄』の非情成仏義は融通の理論をもって、開覚性を具え発心修行すると主張しているところに特色があり、これをもって「無因得果の過」を解決したのであった。

このように『演義鈔纂釈』、『古題加愚抄』における非情の開覚性の有無について、両書は同様の義を説いていることがわかる。非情の開覚性を認める立場の華厳人師は他に確認されないため、『古題加愚抄』は湛睿の著述、もしくはその周辺の人物によるものといって良いであろう。[15] この点を明らかにするため、以下に『古題加愚抄』を内容分析して項目を設定した上で、翻刻・読解することにしたい。なお、翻刻研究にあたっての「凡例」は以下のとおりである。

【凡例】

一、本翻刻は東大寺図書館所蔵『華厳宗論義鈔』（一巻）全二十六丁の内、七丁右から十四丁左の『古題加愚抄』「非情成仏」部分である。

二、本文中に使用されている旧字・異体字・合字に関しては、内容に抵触しない限り常用漢字に改めた。また、「〆」「冂」などの片仮名の略字については、「シテ」「コト」など開いて表記した。

三、割注に関しては〈　〉で括った。また紙数を（　）内に表記した。

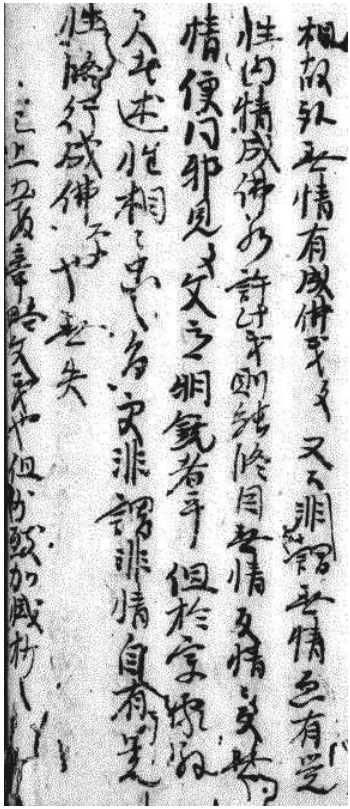
四、虫損等により判読不能の文字については、□により字数分の空格を示した。

五、対校する際、文字の加減は＋または－で示した。【例】甲：＋答

文字の異同は、底本をの文字を記し、イコールで対校本の文字を示した。

【例】乙：（底）耶＝乎。

六、拙稿［二〇一五］で掲載した「古題加愚抄分」のうち誤りであると考えられるものは本稿で訂正した。



【翻刻】

（七右）

古題加愚抄分

問円教意有非情成仏之義可云耶[16]両方若[17]成仏

者凡情非情之差別者可依開覚[18]ノ性之[19]有無ニ若

許非情成仏一何異有情ニ耶若依之尓者円教

意混融シ依正ヲ通シテ三世間ニ満六位之円因ヲ成ス十身

之大果ヲ若不許非情成仏之義一豈可有此等所説

耶[20]是以大師一処解釈中仏性及性起皆通依正文如何

答凡非情成仏者如来成正覚ヲ観見法界ヲ其性一味依

正無ク隔テ情無[21]情無ニナリ故依此ノ性相々融之義ニ立非
（七左）
情成仏之義ニ更非謂無情ニ有覚性ニ故発心修行シテ成
正覚ニ也是以清涼大師解釈中無情成仏是約性相
相融以情之性融無情相以無情相随性融同有情之
相[22]故説無情有成仏義文又云非謂無情亦有覚
性同情成仏若許此義則能修因無情変情々変無
情便同邪見文　文意明鏡者乎但於宗家解
釈者述性相々融之旨ニ更非謂非情自有テ覚
性ニ修行成仏スル也無失
已上五教章略文義也但少致加減抄之

【訓読】
古題加愚抄分
問ふ、円教の意に非情成仏の義有りと云ふべきか。両方なり。若し成仏せば、凡そ情と非情との差別は開覚の性の有無に依るべし。若し非情成仏を許さば、何ぞ有情に異なるや。若し之れに依りてしからば、円教の意、依正を混融し三世間に通じ六位の円因を満たし、十身の大果を成す。若し非情成仏の義を許さざれば、豈に此れ等の所説あるや。是を以て大師一処の解釈の中、仏性及び性起、皆依正に通ずと云々。如何。

答ふ、凡そ非情成仏とは、如来正覚を成じ法界を観見するに、その性一味にして依正に隔て無く、情・無情、無二なり。故に此の性相相融の義に依りて、非情成仏の義を立つ。更に無情に覚性有るが故に、発心修行して正覚を成ずると謂ふこと非ざるなり。是を以て清涼大師の解釈の中に、無情成仏とはこれ性相相融に約し、情の性を以て性に随ひ融して有情の相と同ず。故に無情成仏の義を有するを説くと云々。又云はく、無情に亦た覚性有りて情の成仏と同じと謂ふには非ず。若しこの義を許さば則ち能く因を修す。無情は情に変じ、情は無情に変ず。便ち邪見に同ずと云々。文意の明鏡なるか。但だ宗家の解釈に於いて、性相相融の義を述べ、更に非情自ら覚性を有し、修行成仏すと謂ふには非ざるなり。失無し。

已上、五教章略文義なり。但だ、少し加減を致し之れを抄す。

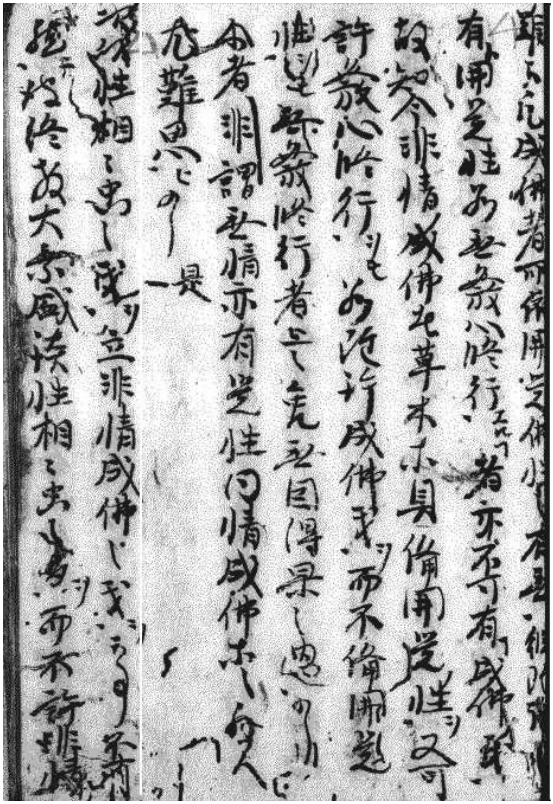
【解説】

『古題加愚抄』ではまず、経論や喜海『五教章略文義』、宗性『華厳宗探玄記香薫抄』、著者不明『華厳肝要抄』、『枝葉抄』などの「古題」から論題が挙げられる。華厳学の論義問答では、問いが示された後、そのいずれであっても智儼・法蔵・澄観などの説との矛盾が生じるという両様（両方）の難が立てられ、それに対して会通して答えが示される。

論題「非情成仏」では、華厳円教において非情が成仏できるか否かを問う。それに対して、成仏できるというなら非情と有情の違いがなくなってしまうという難がまず示される。その上で、華厳円教では依報・正報は混融して十身の大果をなすという。もし非情成仏を許さないなら、このように説かれることはないとして、法蔵の「仏性と性起とは依報・正報に遍満する」という説を示す。そして、いかがかと問うのである。

それに対して、答えでは、如来正覚の時、性相相融の論理に随い、非情も成仏すると説く。しかし、澄観『華厳経演義鈔』の文を引き、非情が有情に転変することもなければ、非情に覚性があって自ら発心修行することもないとする。これが『五教章略文義』の説であるとし、以降、湛睿による疑難が出されるのである。

五、第一問答【問い】



【翻刻】

（八右）

難[23]云凡成仏者可依開覚仏性之有無一縦雖許
有ト開覚性若無発心修行スルコトヲ者亦不可有コト成仏ノ義一
故知今非情ノ成仏者草木等具備開覚ノ性ヲ又可
許発心修行ヲモ若雖許成仏義ヲ而不備開覚

性ヲモ無発心修行者豈免無因[24]得果之過一耶
尓者非謂無情亦有覚性同情成仏等之解釈
尤難思ヒ耶〈是一〉
次以性相々融之義ヲ立非情成仏之義ヲ云事不可
然ニ彼終教大乗咸談性相々融之旨ヲ而不許非情

（八左）

成仏之道理[25]一故知縦雖円教若約性相々融之義一則
全可同終教一何故章中述或一切皆有唯除草木
等如終教説ト章[26]此外更釈或即因果通三世間
如円教説ト又探玄記云若三乗教真如之性通情
非情開覚仏性唯局有情ト次下又云若依円教
仏性及性起皆通依正ト乎明知若円教意実許

非情成仏ヲ則如彼ノ自他有情ノ各別ニ具シ開覚ノ性ヲ修行成仏スルカ草木等亦不待融スルヲ有情之開覚性ヲ則自具シテ開覚ノ性可発心修行ス如是之時方[27]

（九右）

可云許ス非情成仏之義ヲ若但約シテ相融立非情成仏之義ヲ者終教モ亦可談ス此義ヲ豈為円教不共之所談ヲ乎〈是二〉如何

【訓読】

難じて云はく、凡そ成仏とは開覚仏性の有無に依るべし。縦ひ開覚性有りと許すと雖も、若し発心修行すること無くば、亦た成仏の義有るべからず。故に知んぬ。今非情成仏とは、草木等の開覚性を具備し、又た発心修行をも許すべし。若し成仏義を許すと雖も、開覚性をも備へず発心修行すること無くば、豈に無因得果の過を免れむや。しからば無情も亦た覚性有りて、情の成仏と同じと謂ふには非ず等の解釈、尤も思ひ難し。〈是一〉

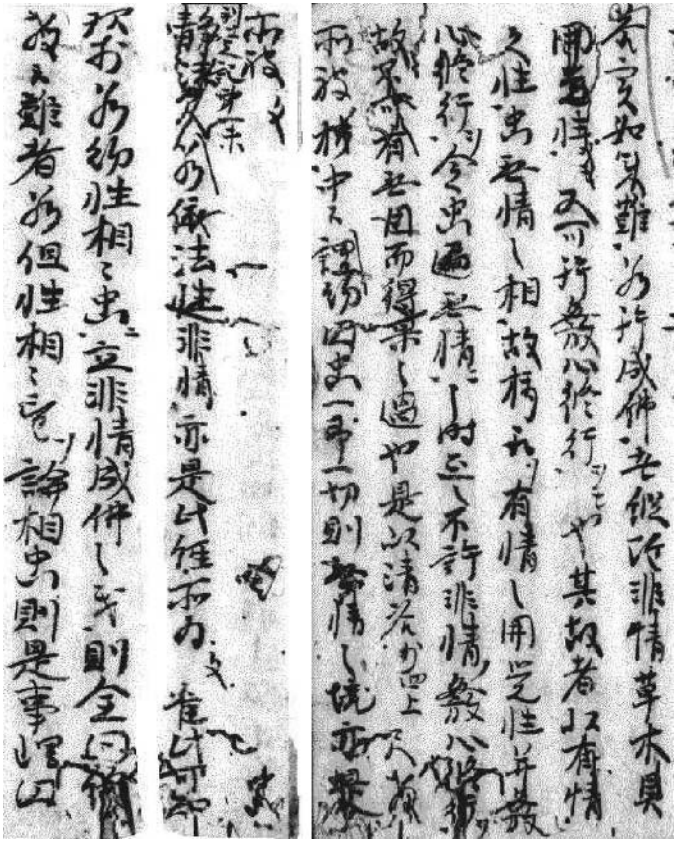
次に性相相融の義を以て非情成仏の義を立つと云ふ事、しかるべからず。彼の終教大乗は咸な性相相融の旨を談ずるも、非情成仏の道理を許さず。故に知んぬ。縦ひ円教と雖も、若し性相相融の義に約さば、則ち全く終教に同ずべし。何の故に章の中、或いは一切皆有り。唯だ草木等を除く。終教に説くが如し、と述ぶるや。章、此の外に更に釈して、「或いは即ち因果は三世間に通ず。円教に説くが如し」とするや。

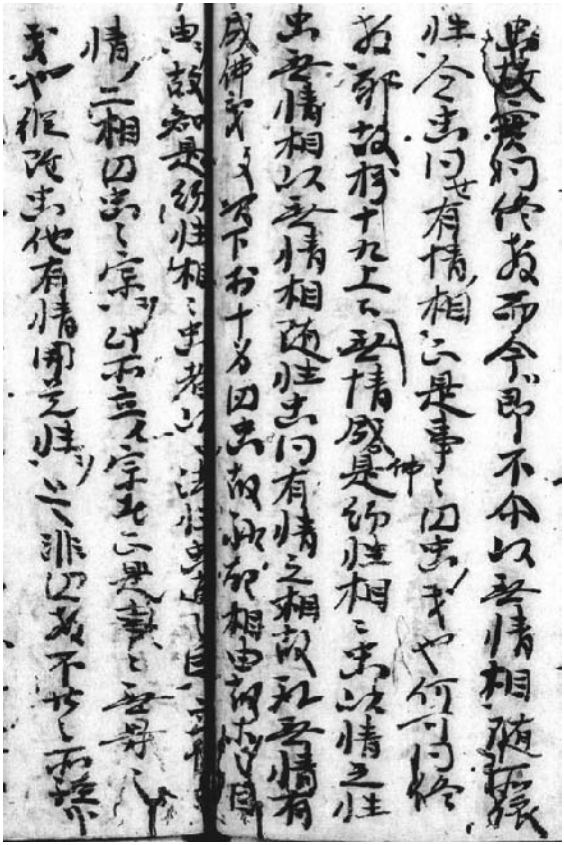
又『探玄記』に云はく、「若し三乗教ならば、真如の性、情と非情とに通ずるも、開覚仏性は唯だ有情に局る」と。次に下に又た云はく、「若し円教に依らば、仏性及び性起は皆依と正とに通ず」と。明らかに知んぬ。若し円教の意、実に非情成仏を許さば、則ち彼の自他の有情、各別に開覚の性を具し、修行成仏するが如く、草木等も亦た有情の開覚性を融するを待たず、則ち自ら開覚の性を具して発心修行すべし。是の如くの時方に非情成仏の義を許すと云ふべし。若し但だ相融に約して非情成仏の義を立つれば、終教も亦たこの義を談ずべし。豈に円教不共の所談と為すか。〈是二〉如何。

【解説】

この第一問答第一疑難においては、まず成仏は開覚仏性の有無によるという説に対して、開覚仏性があっても発心修行することがなければ成仏することはないとする。したがって、非情もまた成仏する以上は開覚仏性を有し、発心修行をも行うと理解すべきだと指摘する。もし非情成仏を述べるにあたって、開覚仏性を備えず、発心修行もしないならば、無因得果の過を免れることができない。したがって、「非情にも覚性があって有情と同じように成仏する」ということを否定する見解は容認できないと難ずるのである。

続いて第二疑難では、華厳円教において仏性や性起が依報と正報とに通じるという「依正不二」説により非情の成仏を説くならば、有情がそれぞれに開覚性を具して修行し成仏するように、非情もまた有情の開覚性を融ずる必要なく、独自に開覚性を具して発心修行できるのではないか、それこそが本当の非情成仏ではないか、と難じているのである。また、あくまでも「相融」によって非情成仏の義を立てるならば、終教においても「相融」が説かれているため、非情成仏義が円教不共の説ではないかと難じている。





【翻刻】

答実如来難一若許[28]成仏一者縦雖非情草木具
開覚性一ヲモ又可許発心修行一ヲモ也其故者以有情
之性一融無情之相一故摂取シテ有情之開覚性並発
心修行一ヲ令融通無情一ニ之時豈不許非情ノ[31]発心修行一ヲ

故不可有無因而[32]得果之過也是以清涼〈抄四上〉釈教
所被ノ機ニ中云謂約円融一即一切則無情之境亦是
（九左）
所被文
〈刊定記第一末〉
静法釈若依法性非情亦是此経所為文准此可知
次於若約性相々融ニ立非情成仏之義ニ則全同終
教云難者若但性相々望シテ論相融則是事理円
融故実同終教而今ハ即不尓[34]以無情相ニ随所依
性ニ令融同セ有情ノ相ニ正是事々円融ノ義也何可同終
教ニ耶[35]故抄十九上云無情成仏是約性相々融以情之性
融無情[36]相以無情[37]相随性融同有情之相故説無情有
成仏義文次下出十身円融故縁起相由故等之因
（十右）
由ヲ故知是約性相々融者以法性融通之因ニ立情非
情ノ二相円融之宗ヲ此所立ノ宗者正是事々無导之
義也縦雖融他有情開覚性ヲ豈非円教不共之所談哉[38]

【訓読】

答ふ、実に来難の如きは、若し成仏を許さば、縦ひ非情草木と雖も、開覚性をも具へ、又た発心修行をも許すべきなり。その故は有情の性を以て無情の相を融するが故なり。有情の開覚性並びに発心修行を摂取して、無情に融通せしむの時、豈に非情の発心修行を許さざるや。故に無因得果の過有るべからざるなり。是を以て清涼〈抄四上〉に教の所被の機を釈す中に云はく、謂はく円融に約さば一即一切なり。則ち無情の境も亦た是れ所被なりと云々。静法の〈刊定記第一末〉に釈して、若し法性に依らば、非情は亦た是れ此の経の所為なりと云々。此れに准じて知るべし。

次に若し性相相融に約して非情成仏の義を立つれば、則ち全く終教に同じと云ふ難は、若し但だ性相相望して相融を論ずれば、則ち是れ事理円融なるが故に、実に終教に同じ。而して今は即ちしからず。無情の相を以て所依の性に随って有情の相に融同せしむ。正しく是れ事事円融の義なり。何ぞ終教に同ずべきや。故に抄の十九の上に云はく、無情成仏は是れ性相相融に約して、情の性を以て無情の相に融じ、無情の相を以て性に随ひて有情の相に同ず。故に無情に成仏の義有りと説くと云々。次に下に、十身円融の故に、縁起相由の故に等の因由を出す。故に知んぬ。是れ性相相融に約すとは、法性融通の因を以て、情非情の二相円融の宗を立つ。此の所立の宗とは、正しく是れ事事無礙の義なり。縦ひ他の有情の開覚の性を融ずると雖も、豈に円教不共の所談に非ざるや。

【解説】

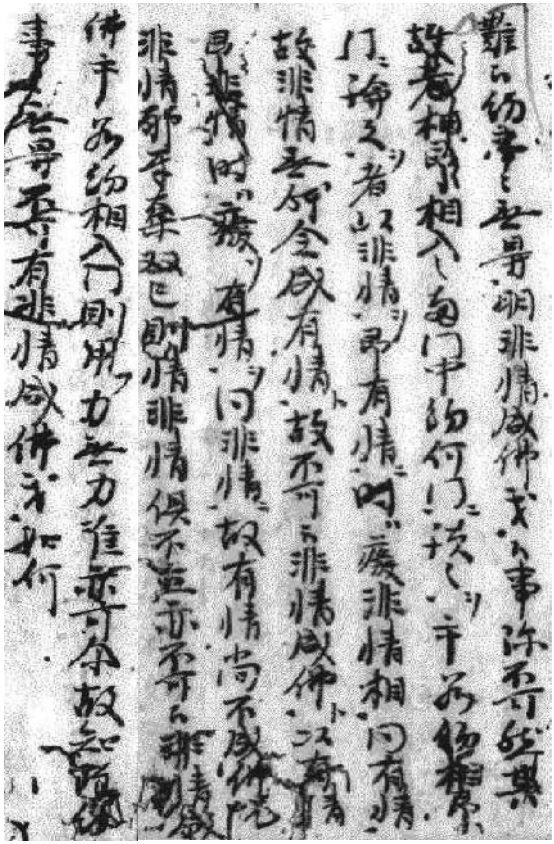
第一問答第一疑難の答えにおいては、まず疑難の趣旨が「非情の発心修行」にあることを指摘する。その上で、澄観の「円融門では一行の中に一切行がおさめられる。よって非情も『華厳経』がおさめるとこ

ろである」という説と慧苑『刊定記』の「法性という観点からみると、非情も『華厳経』の所為である」という説から、有情の性をもって無情の相を融通するため、有情の開覚性と発心修行が非情に摂取され、非情の成仏となるとし、非情の発心修行を主張したのである。これは、聖詮『華厳五教章深意鈔』において発心修行を否定する姿勢と全く異なるものである。湛睿の祖父師であるとされる凝然（一二四〇―一三二一）『華厳五十要問答加塵章』においては「依二一乗義一、一切衆生通二依及正一並皆成仏ストハ者、此一乗義ハ、直チニ出二華厳別教一乗ノ宗義一ヲ。別教義トハ者、一切衆生皆具二仏果一ヲ、依報ト正報ト発心修行シ自利利他ス教義ナリ。[39]」とされている。よって、戒壇院の系統で継承された義であると思われる。

また、第一問答第二疑難の答えでは、事理円融ならば終教と同じだが、一体である所依の性（理）をもって無情の相を有情の相に融同させる「円融」の義（事事無礙）をもって非情成仏を論じているのであるから、終教とは異なる説であると主張する。また、十身円融・縁起・相由などよりすれば、法性融通（事事無礙）による有情と非情の二相円融であるとして、この非情成仏義は華厳円教の教義であると主張するのである。ここでは、第一問答の「融通」の理論をさらに明確に「円融」すなわち「事事無礙」であるとしている点に主張の骨子があるといって良いであろう。

七、第二問答【問い】

（写真は次頁）



【翻刻】

[40]難云約事々無导明非情成仏義云事弥不可然其
故者相即相入之両門中約何門談之乎若約相即
門論之者以非情即有情時廃非情相同有情
故非情無躰全成有情故不可云非情成仏以有情

即非情時ハ廃シテ有情ヲ同非情ニ故有情尚不成仏況
非情耶互奪双亡則情非情倶不立亦不可云非情成
（十左）
仏乎若約相入門則用ヲ力無力准亦可尓故知雖約
事々無导不可有非情成仏義[41]ニ如何

【訓読】

難じて云はく、事事無礙に約して非情成仏の義を明かすと云ふ事、弥しかるべからず。その故は相即相入の両門の中の何の門に約して之れを談ずるや。若し相即門に約して之れを論ずれば、非情を以て有情に即す時は、非情の相を廃し有情に同ずるが故に、非情は無体にして全く有情と成る。故に非情成仏と云ふべからず。有情を以て非情に即する時は、有情を廃して非情に同ず。故に有情尚ほ成仏せず、況んや非情をや。互ひに奪い、双に亡すれば、則ち情と非情と倶に立たず。亦た非情成仏と云ふべからず。若し相入門に約さば、則ち用ふ力は無力なり。准じて亦たしかるべし。故に知んぬ。事事無礙に約すと雖も、非情成仏の義有るべからず。如何。

【解説】

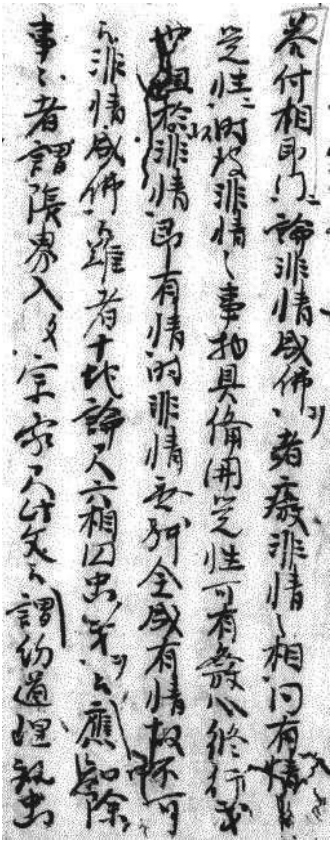
次に第二問では、事事無礙における「非情成仏」説に対しての疑難が展開される。

まず相即門の立場では、非情が有情に相即する時、非情の相を廃絶し有情となる。この時、非情の体はなくなり有情となるため、非情成仏ということはできないのではないかと論難する。さらには、有情が非

情に相即する時、有情の相を廃絶して非情と同ずるので、有情もまた成仏しないことになってしまうので、非情はなおさら成仏しないのではないかと難じている。

また、相入門の立場からも同様であり、事事無礙という点で非情成仏の義はないと難じている。

八、第二問答【答え】



【翻刻】

答付相即門ニ論非情成仏ヲ者癈非情之相ニ同有情之
覚性ニ時被非情之事物具備開覚性可有発心修行義
也但於[42]以非情ニ即有情ニ時非情無躰全成有情故不可
云非情成仏ニ云難者十地論釈六相円融ノ義ヲ云応知除
事々者謂陰界入文宗家釈此文云謂約道理説融
通非是陰等事相中弁故除揀之文准此ニ約道理ニ
云ヲ癈ッ非情ノ相ヲ同スト[43]有情之[44]相非謂ニハ全撥[45]無スト[46]其事
（十一右）
相ニ尓者[47]縱雖癈非情相既許[48]有情開覚之相非謂
全撥無スト其事相ヲ尓者性ニ豈無非情成仏之義乎
一義云抄一上云初発心時便成正覚因該果也文五教章等
並約相即門ニ釈之ニ然決択第一云此文正拠ルカ以因ヲ即
果ニ義ニ故乃[50]説初心成仏ニト問曰初心即果ニ初心有ナリ耶[51]

無ナリ耶[52]若許無一者不応説初心成仏一若許有者能
即ノ体不存一耶答曰由其即ニ故乃説成仏一由ルカ不壊相ニ[53]乃
説初心ニ二義[54]取説得初心成仏此則即ハ拠壊ノ義ニ不即ハ
不壊義ナリ終日壊レトモ而不壊一故云初発心時便成正覚文
（十一左）
准此一由其ノ即ニ故説成仏ト由不壊相一故乃説非情ト双[55]取二
義一則説非情成仏義〈為言〉

【訓読】

答ふ、相即門につきて非情成仏を論ずれば、非情の相を廃し有情の覚性に同ずる時、非情の事物を被り開覚性を具備し、発心修行の義を有すべきなり。但だ「非情を以て有情に即する時、非情は無体にして全く有情と成る。故に非情成仏というべからず」と云ふ難は、十地論に六相円融の義を釈して云はく、「当に知るべし、事事を除くとは謂はく陰界入なり」と云々。宗家は此の文を釈して云はく、「謂はく道理に約して融通を説くは、是れ陰等の事相の中に弁ずるに非ず。故に之れを除揀す」と云々。此れに准じて道理に約せば、非情の相を廃し有情の相に同ずと云ふ。全く其の事相に揆無すと謂ふには非ず。しからば縦ひ非情の相を廃すと雖も、既に有情の開覚性を許す。豈に非情成仏の義無からむや。

一義云はく、抄一上に云はく、「初発心の時、便ち正覚を成ずるとは、因の果を該す」と云々。五教章等は並べて相即門に約して之れを釈す。然るに決択の第一に云はく、「此の文は正しく因を以て果に即する

義に拠るが故に、乃ち初心成仏と説く」と。問ふて云はく、初心は果に即すれば初心有なりや。無なりや。若し無と許さば、応に初心成仏を説くべからず。若し有と許さば、能即の体、存せざるや。答へて曰はく、その即に由るが故に乃ち成仏と説く。相を壊さざるに由るが故に乃ち初心と説く。二義を取り、初心成仏を得と説く。これ則ち即は壊の義に拠り、不即は不壊の義なり。終日、壊すれども壊さず。故に初発心時便成正覚と云へり。此れに准じてその即に由るが故に成仏と説き、不壊相に由るが故に乃ち非情と説く。双じて二義を取れば則ち非情成仏の義を説くなり。〈為言〉

【解説】

次に事事無礙という点からすると、相即門・相入門のいずれにおいても非情成仏の義を説くことはできないとする第二問に対して、答文では、相即門において非情の相を廃絶し有情の覚性と同一となる時、非情の事相は開覚性を具えるので、発心修行して成仏することができると主張する。また、非情が有情となってしまい、非情としての体がなくなってしまうという論難に対して、『十地論』の六相円融義を引き、法蔵『探玄記』の解釈を示し批判する。つまり、「道理という観点から蘊界入という事相の体が融通を説く時、六相を具えないということはない」ということから、非情の相を廃絶して有情の相に融同するとはいっても、まったく非情の相がなくなるわけではないとし、非情成仏の義を主張しているのである。

また、「初発心時便成正覚」を解釈した澄観『華厳演義鈔』「十信の終心という因に作仏という果を該摂する」という説を引用し、続けて初心成仏について問いを立てる。つまり、初心が果であればその初心は有であるのか、無であるのかという問いである。これは湛睿『演義鈔纂釈』と同一の問答である。これに対し、鮮演『華厳経談玄決択』を引き、初心は「即」によって因が果をおさめていることが成仏を説き、

相を壊さないまま不作であることが初心であるという二義により、初心成仏と説く。「壊」と「不壊」が無礙であるから初発心時便成正覚というのである。同様に、「即」により因該果であるから成仏と説き、非情が非情としての自相を守り、他と交じり合うことがないことから非情成仏と説くのである。

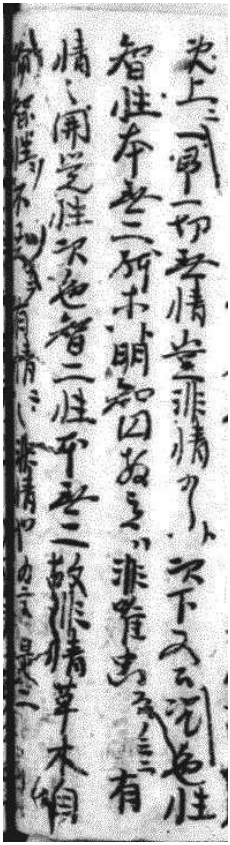
以上のように、「性相相融」「事事無礙」「因該果」という点で問答がなされてきた。一貫して湛睿の立場は「非情成仏」であり、「発心修行」が可能であるという立場であった。以降、また異なる視点から談義が展開していく。

九、談義【問い】

（写真は次頁）

不知性智性不之二故非情草木之不備智性[illegible]
得出有情之用之性平為不分九色者二性可分
所為行之二九能能不出有情之性何不備智性
平為行情者智性九即是用之性故之不敬[illegible]
德行平故知因故中可有二之為功事之異[illegible]

[illegible]出有情之用之性美功色者二性之二狀[illegible]
則非情自[illegible]用之性故故杨四上云謂功因出[illegible]
一切別之情之說亦是而祇況前亦有佛性而株[illegible]
言於非情即非情故一即一切之情之非情[illegible]
況色性智性平之二狀之有情所之非情故[illegible]



【翻刻】

尋云大疏釈非情成仏義云既二性相即縁復即性故無[56]
少分トシテモ非覚者ニ況心為総相一又融摂重々哉文
准此以三義ヲ釈之一謂一約ス色性智性二性相即互融之
義一彼抄〈十二下〉引起信論従本以来色心不二以色性即
智故等之文一釈成之一被結釈云今取二性相即互融
之義説耳文二約唯心義一彼抄釈云前約一性義今結
唯心義総相則無所不摂文三約事々無尋重々
（十二右）
融摂義一彼抄釈云又融摂重々即本経意随
挙一塵一即含法界一何令色境非一性耶文此三
義中初是事理無尋[59]欤故引起信ヲ釈成之ヲ[60]遍[61]終

教一欤何必唯約事々無导二為円教不共之所談一耶[62]〈是一〉
次色性智性本無二故非情草木無不備智性[63]何心
得融[64]有情之開覚性乎若不尓者色智二性可成別
躰一若許無二者縦雖不融有情之性一何不備智性一
乎若許備[65]智性一ヲ者[66]即是開覚性[67]故豈不発心
修行乎故知円教中可有二意若約事々無导一ニ則
（十二左）
実可融有情之開覚性一ヲ若約色智二性無二躰之義[68]
則非情自備[69]開覚性一欤故抄四上云謂約円融一即
一切則無情之境亦是所被況前等有仏性而揀之耶
言被非情即非情故一即一切無情豈非情耶
況色性智性本無二躰無有情外之非情故思之文
既上ニ[72]一即一切無情豈非情耶一ト次下又云況色性
智性本無二躰等一ト明知円教意ハ非唯融スルノミニ有
情之開覚性況[73]色智二性本無二故非情草木自
備智性ヲ不異ナラ有情ニ之非情也〈為言〉〈是二〉

【訓読】

尋ねて云はく、大疏に非情成仏の義を釈して云はく、既に二性相即し、縁も復た性に即するが故に、少分としても覚者に非ざること無し。況んや心を総相と為し、又た重重を融摂すと云々。此れに准じて三義を以て之れを釈して、謂はく、一つに、色性智性に約し、二性が相即互融すの義なり。彼の抄〈十九〉に、起信論を引きて、「本より已来色心は不二なり。色性は即ち智を以ての故に」等の文、之れを釈成す。彼の結釈に云はく、「今二性の相即互融の義を取り説くのみ」と云々。二つに、唯心義に約す。彼の抄に釈して云はく、「前に一性の義に約して、今唯心義を結す。総相は則ち摂めざるところなし」と云々。三つに、事事無礙・重々融摂の義に約す。彼の抄に釈して云はく、又た融摂重重は即ち本経の意なり。一塵を随挙すれば即ち法界を含む。何ぞ色と境をして一性にあらざらしむや」と云々。此の三義の中の初めは是れ事理無礙なり。故に起信を引いて之れを釈成するは終教に遍ずるなり。何ぞ必ずしも事事無礙のみに約して、円教不共の所談となすや。〈是一〉

次に色性と智性とは本より無二なるが故に、非情草木は智性を備えざること無し。何ぞ必ずしも有情の開覚性を融することを得るや。若ししからずんば、色智の二性は別体と成すべし。若し無二なるを許さば、縦ひ有情の性を融さずと雖も、何ぞ智性を備へざるや。若し智性を備ふるを許さば、即ち是れ開覚性の故に、豈に発心修行せざるや。故に知んぬ。円教の中に二意有り。事事無礙に約さば、則ち実に有情の開覚性を融すべし。若し色智の二性、無二の体の義に約さば、則ち非情自ら開覚性を備ふ。故に抄四上に云はく、謂はく円融の一即一切に約さば、則ち無情の境も亦た是れ所被なり。況んや前に等しく仏性有りて之れを揀ぶや。非情を被るは即ち非情と言うが故に、一即一切なり。無情豈に非情ならむや。況んや色性と智性は本より無二の体なり。有情の外の非情無きが故に。之れを思へ」と。既に上に「一即一切なり、無

情豈に非情ならんや」と云ふなり。

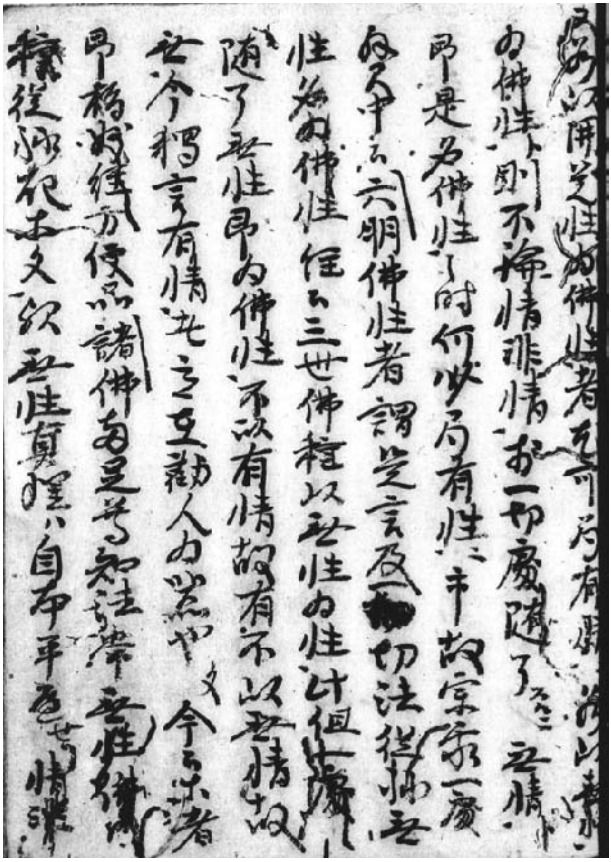
次に下に又云はく、「況んや色性智性本より無二の体なり」等と。明らかに知んぬ。円教の意は唯だ有情の開覚性を融するのみに非ず。況んや色智の二性本より無二なるが故に、非情草木自ら智性を備え、有情に異ならざるの非情なり。〈為言〉〈是二〉

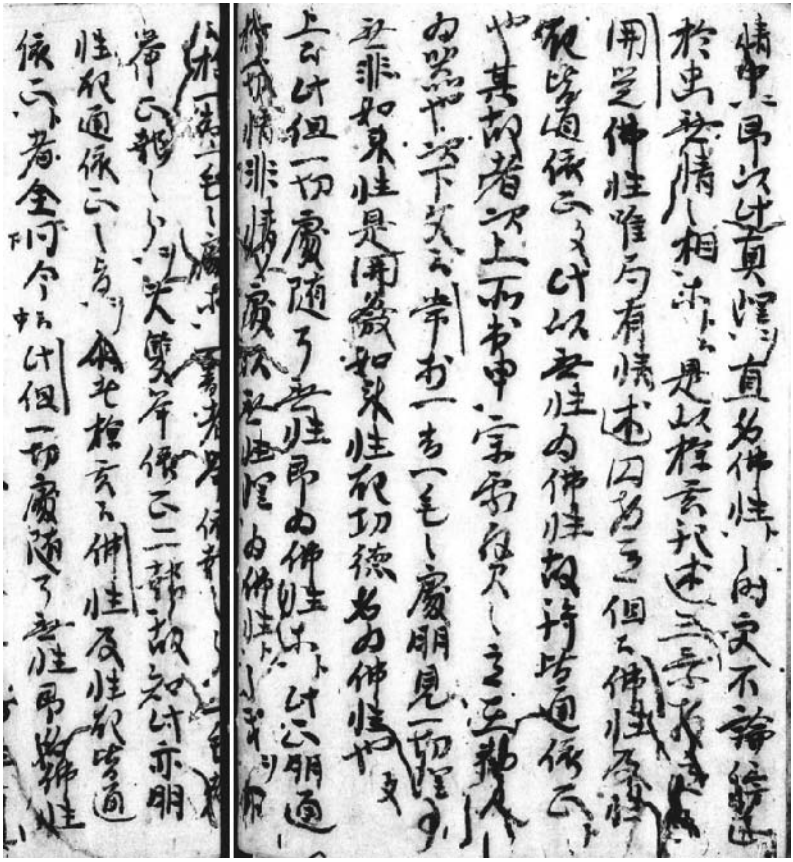
【解説】

本談義では、まず二つの疑難が示される。（1）❶色性と智性とが相即すること。❷唯心義によること。❸事事無礙の道理によること。この三義のうち❶は事理無礙の義であるため終教の義であるから、この非情成仏義が円教不共の説であるといえるのか、（2）『大乗起信論』に説かれるように色性と智性とは本来無二である。そうであれば非情は本来智性を備えているはずであり、有情の性を融通する必要がない。どうして円教位において非情が有情と異なるものとなろうか、というものである。

十、続き

（写真は次頁）





乃至常於一切一色一香不離又次色性如佛性者
常照二性俱有不守自性之德故由常性不守
自性故成相好之妙色由照性不守自性故成
布施等為不守性故成草木國土則
地獄皆是法性全收大行又為但執以用
性如佛性之一色者唯是自受用佛中法性名神
性　大乘七下八十二曰彼竟配屬佛性
曰彼名曰佛性徹彼者昂曰性曰至果成
并性曰性至果成是性

【翻刻】

（十三右）

又若以[74]開覚性為仏性一者尤可局有情一若以無性
為仏性一ト則不論情非情一於一切処随了スルニ無情[75]一ト
即是名仏性一ト之時何必局有性[76]二乎故宗家一処
解釈中云六明仏性者謂覚言[77]及一切法従縁無
性名為仏性経云三世仏種以無性為性一此但一[78]処
随了無性即為仏性二不[79]以有情故有不以無情故
無今独言有情[80]一者意在勧人為器也文今云[81]等者
即指妙経方便品諸仏両足尊知法常無性仏
種従縁起等文一欤無性真理ハ自本平遍セリ情非

（十三左）

情中ニ即以此真理ヲ直名仏性一ト之時更不論傍正
於融無情之相一等ト云々是以探玄記述三乗教云
開覚仏性唯局有情述円教意但云仏性及性
起皆通依正文此以無性為仏性故許皆通依正ト
也其故者次上所出申一宗家解釈之意在[82]勧人
為器也[83]次下文云常於一塵一毛之処明見一切理事
無非如来性是開発如来性起功徳名為仏性也文

上云此但一切処随了無性即為仏性等ト此正明通
於一切情非情ノ処以無性理ニ為仏性ト之義ヲ下
（十四右）
云於一塵一毛之処等ニ一塵者挙依報之分ニ一毛者
挙正報之分ヲ既双挙依正ニ報ニ故知此亦明
性起通依正之旨ヲ尓者探玄云仏性及性起皆通
依正ト者全同下今云中此但一切処随了無性即名仏性
乃至常於一塵一毛之処等ト又以無性為仏性者且
寂照二性倶有不守自性之徳ニ故由寂性不守
自性故成相妙[84]之妙色ヲ由照性不守自性故成
本後真[85]若尓寂性縁起成草木国土ニ則香花
灯塗皆是法[86]性全説[87]之大行又若但執以開覚
（十四左）
性為仏性ニ之一辺ニ者唯是自受用仏也法性身仏
性　大疏七下釈十二因縁竟配属仏性ニ云即此
因縁名因仏性観縁之智即因々性因々至果成
菩提性因性至果成涅槃性文

【訓読】

又た若し開覚性を仏性となさば、尤も有情にのみ局るべし。若し無性を以て仏性となさば、則ち情と非情とを論ぜず。一切処に於て無性を随了して即ち仏性と為すの時、何ぞ必ずしも有情[88]に局らんや。故に宗家一処に解釈する中に云はく、「六つに仏性を明かさば、謂わく塵及び一切法を覚るに、縁に従ひて無性なるを名づけて仏性と為す。経に云はく、三世仏種、無性を以て性と為る。此れ但、一切処にて無性を随了して即ち仏性と為す。有情を以ての故に有ならず、無情を以て無ならず。今独り有情を言ふは、意は人に勧めること在りて器と為すなり」と云々。

今云等とは、即ち『妙経』の「方便品」に、「諸仏の両足は尊く、法は常に無性にして、仏種は縁起に従るを知る」等の文を指す。無性なる真理は本より情非情の中に平遍せり。即ちこの真理を以て、直ちに仏性と名づくるの時、更に依と正を論ぜず。無情の相を融するにおいて等と云々。是を以て探玄記の三乗教の意を述べて云はく、開覚仏性は唯有情にのみ局ると。円教の意は但仏性及び性起は皆依報と正報とに通ずと云々。此を以て無性を仏性と為す。故に皆依正に通ずるを許すとなり。その故は、次に上に出申する所の宗家の解釈に云く、「意は人に勧めること在りて器と為すなり」と。次に下の文に云はく、「常に一塵一毛の処に於いて一切の理事、如来性にあらざることなし。是如来性起功徳を開発するを名づけて仏性と為すなり」と云々。上に云はく、「此れ但し一切処に無性を随了す、即ち仏性等と為す、此れ正しく一切の情と非情の処に通ず。無性の理を以て仏性を為すの義を明かす。一塵一毛の処等に於いて、一塵とは、依報の分を挙げる。一毛とは、正報の分を挙げる。既に双じて依正の二報を挙げるが故に、此れを知る。亦明らかに性起は依正の旨を通ず。しからば、『探玄記』に云はく、「仏性及び性起は皆依正と通ずとは、全く今此れ但し一切処に無性を随了す、即ち仏性と名づける、乃至常に一塵一毛の処等と云ふに同じ。

又た無性を以て仏性と為すとは、且らく寂照の二性、倶に自性を守らざるの徳あるが故に。寂性は自性を守らざるに由るが故に、相好[89]の妙色を成ず。照性は自性を守らざるに由るが故に、本後の真智を成ず。若ししからば、寂性は縁起して草木国土と成る、則ち香花灯塗、皆是れ法性にして、全説の大行なり。又た若し但だ執して、開覚性を以て仏性と為すの一辺は、唯だ是れ自受用仏なり。法性身は仏性と為す。大疏の七下に十二因縁を釈し竟り仏性を配属して云く、即ちこの因縁、因仏性観と名づく、縁の智とは即ち因因性なり、因因は果に至り、菩提性を成す、因性は果に至り、涅槃性を成すと云々。

【解説】

また、開覚性自体についての義が立てられる。つまり開覚性が仏性であるとするならば有情だけに認められ、無性が仏性であるとすれば、有情と非情との区別を論じることはないとする。この議論は、前述の通り、旧来華厳宗で説かれてきたものであり、中国華厳諸師の説では十仏としての成仏は認めるものの非情自体としての成仏は認めない。よってここからも非情成仏義の基本的道理が無性が隨縁した仏性が有情・非情とに区別なく遍満しているというものであることがわかる。

さらに無性をもって仏性とすることについて澄観『華厳経疏』の「十二因縁を因仏性とする。十二因縁を観ずる智を因因性とする。この因因により果に到達し、菩提性を成じる。また因性に到達し、涅槃性を成じる」という文を引き説明する。つまり、無性を成立させる寂性（真智としての理体）と照性（真智としての用）はそれぞれの自性を守って改めないまま、寂性は相好を示し、寂性は縁起して草木国土となる。

十一、むすび

以上、簡略ではあるが『古題加愚抄』の書誌概略と教義的特色を述べてきた。まとめると以下の通りである。

現在確認できる『古題加愚抄』は管見の限り、東大寺図書館所蔵と金沢文庫所蔵の八部十五種である。書き込み、文字の出入りなどから判断すると、金沢文庫所蔵『古題加愚抄』は湛睿の草稿本であると考えられる。また、「龍女成仏」に記されている湛睿の奥書をみると、湛睿自身に正式な論義法会のための用意として本書を著述したという意思はみられず、寺院内での「談義」で使用するため、または自身の勉学のために著述したと考えられる。

また、本奥書が記されていない『古題加愚抄』の著述者については、今回の研究によって湛睿であると判断した。なぜならば、湛睿が『演義鈔纂釈』において「非情にも開覚仏性がある」と示したのと同様に、『古題加愚抄』「非情成仏」においてもそのことが述べられているからである。管見する限り、日本華厳において非情に開覚性を認める立場は湛睿以外に認められないので、『古題加愚抄』「非情成仏」も湛睿による著述であったと考えられるのである。

さらに『古題加愚抄』「非情成仏」の特徴として、「発心修行」「性相相融」「事事無礙」等という視点から疑難を設けている点が挙げられる。

非情の発心修行を認めるか否かという疑難に対しては、非情も有情と同じように発心修行して成仏するという姿勢を取ることが挙げられる。その理由として、円融門においては有情の性によって非情の相を融通し、有情の開覚性を非情が摂取するためであるという。一方、聖詮の『華厳五教章深意抄』や聖憲の『華厳五教章見聞鈔』においては、否定的な見解が示されていた。その起源を探るに、湛睿の祖父師であ

るとされる凝然（一二四〇―一三二一）の『華厳五十要問答加塵章』においてすでに「別教義トハ者、一切衆生皆具ヘ仏果ヲ、依報ト正報ト発心修行シ自利利他スル教義ナリ。[90]」という見解が示されてされていた。よって、「非情成仏」義は戒壇院の系統で継承された義ではなかろうかと推測される。

また「性相相融」「事事無礙」という視点からの疑難に対しては、相即門・相入門のどちらでも非情が非情としての自性を守り、成仏すると主張する。しかし、澄観が「非情に覚性があって有情と同じように成仏することはない。無情が非情に転変し、非情が有情に転変するというのは邪見である」という説に対しては、対応していない。

それではなぜ、湛睿が非情成仏に対してこれほどまで柔軟な態度を見せるに至ったか、という点については、今後解明していきたい。

【付記】本稿執筆にあたり、貴重な資料を閲覧・複写させてくださった東大寺図書館・神奈川県立金沢文庫のご厚意に対し衷心より深謝申し上げます。

【主要参考文献】

金　天鶴：「平安時代の華厳私記類における成仏論」、『印度学仏教学研究』五六―二、二〇〇八年
楠　淳證：「貞慶撰『安養報化』（上人御草）の翻刻読解研究」、『南都仏教』九五、二〇一〇年
高田　悠：「日本華厳における「非情成仏」の展開」、『龍谷大学大学院文学研究科紀要』三七、二〇一五年

張　文良：『澄観　華厳思想の研究』、山喜房仏書林、二〇〇六年
道津綾乃：「湛睿著『随自意抄』について」、『印度学仏教学研究』六一-一、二〇一二年
「湛睿著『随自意抄』復元試論(1)」『金沢文庫研究』三三〇、二〇一三年
納富常天：『鎌倉の教学―金沢文庫資料を中心とした華厳教学―』、鎌倉市教育委員会鎌倉国宝館、一九六四年
『金沢文庫資料の研究』、法蔵館、一九八二年
「湛睿の事績」、『駒澤大学佛教学部論集』一六、一九八五年
蓑輪顕量：「東大寺所蔵の法会に関する写本―経釈と論義―」、『印度学仏教学研究』五二-二、二〇〇四年

1蓑輪顕量『日本仏教の教理形成：法会における唱導と論義の研究』九頁（大蔵出版、二〇〇九年）、楠淳證「貞慶撰『安養報化』（上人御草）の翻刻読解研究」（『南都仏教』九五、二〇一〇年）、藤丸要『華厳宗要義講読』七八頁（永田文昌堂、二〇一四年）など。

2蓑輪顕量「東大寺所蔵の法会に関する写本―経釈と論義―」『印度学仏教学研究』五二-二、二〇〇四年

3蓑輪顕量「東大寺所蔵の法会に関する写本―経釈と論義―」『印度学仏教学研究』五二-二、二〇〇四年

4大正一二・五八一上

5金天鶴「平安時代の華厳私記類における成仏論」『印度学仏教学研究』五六-二、二〇〇八年、拙稿「日本華厳における「非情成仏」の展開」『龍谷大学大学院文学研究科紀要』三七、二〇一五年

6納富常天『鎌倉の教学』一三七頁

7 東大寺図書館所蔵『古題加愚抄』「龍女成仏」十三丁右

8 『古題加愚抄』の構成は多くの場合、「古題」：喜海『五教章略文義』、宗性『華厳宗探玄記香薫抄』、著者不明『華厳肝要抄』、『枝葉抄』、「宗―僧正御作」、「顕玄得業之御草」などの論題を挙げる→「難じて云ふ」、「答へて云ふ」と問答が続く。その後、「尋ねて云ふ」や「私かに云ふ」、「愚推して云ふ」などが個々の論題に則して問いが立てられ、一定の書式で著述されていない。

9 東大寺図書館所蔵『古題加愚抄』「第九識体」（121／310）四丁左、「龍女成仏」（121／357）十四丁左

10 大正五七・二八一中

11 『華厳経探玄記』（大正三五・四〇五下）

12 聖詮『華厳五教章深意鈔』（『大正』七三・一二下）

13 『華厳宗論義鈔』八丁右

14 『華厳宗論義鈔』八丁右

15 『古題加愚抄』にある「問。初心即果、初心有耶、無耶。」という部分が、その他の書物にみられず、湛睿『演義鈔纂釈』（『大正』五七・六二中）にのみ見られ、『古題加愚抄』にある「実如来難」という表現が湛睿の著作に多く見られるという点も、『古題加愚抄』が湛睿による著述であるという証左になろう。

16 甲：＋答

17 甲：＋云

18 甲：＋之

19 甲：－之

20 乙：（底）耶＝乎

21 甲：（底）無＝非

22『大正』では「性」となっている。（『大正』三六・六二八上）
23甲乙：＋第三重
24乙：＋而
25甲：（底）道理＝義
26甲：（底）章＝竟
27甲乙からの補足。
28甲：（底）若許＝許若
29甲乙：＋今か。
30甲：－之
31甲：＋之
32乙：＋乎
33甲：－而
34甲：（底）尓＝然
35甲：（底）耶＝哉
36甲：＋之
37甲：＋之
38乙：（底）哉＝乎
39『日仏全』華厳小部集一三・下
40甲：＋四、乙：＋第四重

41甲：＋之
42甲：－於
43甲：＋有
44甲：－之
45甲：（底）廃＝癈
46甲：－無
47甲：（底）尓者＝者尓
48甲乙：＋同
49惣か物か
50甲：（底）乃＝則
51甲：（底）耶＝哉
52甲：（底）耶＝哉
53甲：＋故
54甲：＋発
55甲乙から補った。
56乙：＋第五重
57乙：五下
58甲乙：－性
59乙：＋門か

60甲乙：＋可
61甲乙：通か
62乙：（底）耶＝乎
63以降、乙本欠落。
64甲：（底）得＝待
65甲：－備
66甲：＋備
67甲：＋之
68甲：－開
69甲：＋者
70甲：＋具
71甲：－備
72甲：＋云
73甲：（底）況＝以
74甲：（底）以＝為
75甲：性か
76甲：情か
77甲：（底）言＝塵
78甲：＋切

79甲：＋為

80甲：（底）有＝無

81甲：＋経云

82甲：－在

83甲：＋之

84甲：（底）妙＝好。底本では「妙」となっているが、甲本「好」の方が適切であると思われるので、訂正した。

85甲：＋智

86甲：（底）法＝仏

87甲：（底）説＝現

88底本では「性」となっているが、甲本乙本「情」の方が適切であると思われるので、訂正した。

89甲：（底）妙＝好。底本では「妙」となっているが、甲本「好」の方が適切であると思われるので、訂正した。

90『日仏全』華厳小部集一三下